

# 展望台

## 後方（ロジスティクス）と運用 （オペレーション）の連携強化

大島 孝二



海上自衛隊補給本部は平成10年12月8日に創立され、今年で20周年を迎えます。この間、海上自衛隊の後方支援の実施全般に係る企画・総合調整・指導を行う後方中枢機関としての役割を担ってきました。

昨今、我が国を取り巻く安全保障環境は一層厳しさを増しています。特にこれまで核・ミサイル開発を加速させてきた北朝鮮の動向は、新たな展開を見せてはいるものの不透明であり、一方、中国は東シナ海での活動範囲・活動回数を拡大・増大しながら積極的に海洋進出を続けています。こうした情勢の変化に対して、我々は常に精強な隊員・装備、即応できる体制をもって、「備え」、「構え」、そして「対処」していかなければなりません。

補給本部ではこれまで、平時における「備え」として、「基盤的な後方支援活動」を地道に継続し、装備品や作戦資材などの造修・整備・補給・調達等の業務をより効率的、経済的、持続的に実施するための態勢の整備を推進してきました。特に、艦船・航空機の可動率の維持・向上のため、信頼性管理を強化し、不具合データの収集・分析等から可動率トレンドの把握に努め、定期修理間隔や整備方式の見直し、故障頻

度・交換頻度の高い予備品の確保、装備品の改修・改善による整備性の向上、製造中止部品に対する代替品の選定等に取り組んできました。これに加え、近年はグレーゾーンにおける「構え」、さらに有事における「対処」として「運用的な後方支援活動」をより重視し、作戦・運用部隊の活動を円滑かつ迅速に支援するための『真に戦える後方支援態勢』を目指しています。

今まさに後方支援に求められるものとは、装備品の新たな導入や近代化に対応し、後方支援に直接影響を及ぼす社会・経済・科学技術等の変化に適応し、作戦・運用部隊のニーズを適時的確に把握しながら、より先行的に必要な時期・必要な地域に必要な能力の装備品や作戦資材などを着実・確実に準備・提供し、作戦・運用部隊の切れ目のない能力発揮に資することです。

これまでの演習等では、弾薬・燃料の保有数量や後方支援活動などを想定とするケースも多く、部隊の作戦が後方支援の制約を受けるという認識が必ずしも十分ではありませんでした。近年は、運用サイドと後方サイドの双方が、後方支援の能力の限界が作戦・運用部隊の能力の限界に直結することを認識し、日々の情報共有の場を通じて、後方サイドから後方支援の制約を確実に示すとともに、運用サイドは後方支援の制約を踏まえつつ、効果的かつ効率的な作戦計画を立案しています。他方、後方サイドも運用サイドの作戦構想を十分に理解しつつ、実現のための後方支援態勢の改善を推進しています。こうした、運用サイドと後方サイド双方の調整メカニズムを活用し、目的を達成するために他に手段はないかを常に試行錯誤しながら、計画・分析・評価・修正を繰り返し、最適な作戦を選択しています。

ここで、最近の補給本部の取り組みの一例を紹介します。

一つ目は、艦船の修理統制です。これまでは、艦船の搭載機器等が故障した場合、定係港に帰投し修理する形態が一般的でした。近年は、速やかに任務に復帰できるよう、修理期間の短縮

を追求しています。そこでまず、司令部等と調整し、任務達成に不可欠な機能の確保を優先し、修理する機器の優先順を決定します。修理の実施においては、海外も含め定係港以外への整備員の派遣や予備品の配送はもちろんのこと、遠隔技術支援として、洋上の艦船乗員と陸上基地の技術者との間で衛星通信により故障状況を確認、修理箇所・交換部品を特定し、修理・交換要領の指示を行います。なお交換部品が必要な場合、全国に在庫品がない時には、修理・検査中の艦船からの一時部品取りなどで対処します。洋上への輸送手段としては、艦船間の洋上輸送や回転翼機による輸送、固定翼機からの物量傘投下などの手段も活用します。

二つ目は、弾薬の整備統制及び燃料の在庫管制です。弾薬に関しては、作戦・運用部隊から弾種の搭載所要数、搭載時期等の情報を得て、全国の各部隊の整備能力を踏まえ、計画的な整備弾数を決定しています。一方、燃料に関しても、各基地の運用所要を踏まえ、燃料タンクの最低保有基準を設定し、補給艦や陸上輸送による全国的なタンク・オペレーションを展開しています。

補給本部では、情勢の変化に直面しているこの時期を改革・改善の好機と捉え、作戦・運用部隊との一体感、すなわち作戦・運用部隊と現場において共に行動している「常在現場」の感覚をもって、先行的かつスピード感のある対応に努めています。

今後、運用の要求に応じていくためには、Maintenance Free かつ省人化に対応した装備品の導入、ビッグデータ・AIを活用した機器の状態モニタリングと故障診断、高速・広域の洋上輸送のための無人機の導入など技術的な支援が不可欠です。今後とも、後方支援を考慮した装備品の研究開発の推進に大いに期待しています。

海上自衛隊 補給本部長／海将